



近くのまちあるき 石岡 土浦 水戸

「西の富士、東の筑波」

そう称されるほど、古来より、筑波山は関東平野のランドマークでした。その立姿から「紫峰」とも称されます。

標高はわずか877m、富士山と比して、山容も決して美しいとはいえません。

しかし、広大で真っ平らな関東平野にあって、孤高に立つその姿は、東京（江戸）の人々の脳裏に、印象深く焼きついたのかも知れません。

上の写真向かって、左を男体山、右を女体山といい、それぞれの山頂には筑波山神社の本殿があり、山腹には拝殿があります。開山以来、結界が張られていて、明治、戦後の一時期に荒れたようですが、いまでも霊山であり、山の万物が御神体とされています。



右の写真は東京（江戸）方面からみた山容で、この方向からの筑波山が最も美しく見えるようです。夕陽に照らされた姿が「紫峰」と呼ばれたのかも知れません。

筑波山は、江戸の鬼門にあたります。

家康は、その護りとして筑波山を崇め、中禅寺(筑波山神社)を祈願所に定めました。

三代家光は、寛永3年(1626)に堂社を一新する工事にとりかかります。

このとき、資材運搬路として整備されたのが「つくば道」です。

後に参詣道とりなり、江戸方面から多くの参詣客がこの道をたどり、筑波山に詣でることになりました。

つくば道は、山麓の北条を起点として、南麓を一直線に上っていきます。

門前町の神郡を過ぎると、筑波山は正面にせまり、まもなく急坂の山道に差しかかります。

急坂はやがて石段になり、登り詰めた場所に筑波神社の拝殿があります。

参詣者は、ここから山頂の本殿を遥拝することになります。



男体山 本殿

### 筑波神社拝殿

江戸時代、この場所には中禅寺の本堂がありましたが、神仏分離で廃され、明治8年に新たに拝殿が建てられました。



筑波神社 拝殿

## つくば道

筑波山麓から一直線に上る 参詣道



# 神 郡

## 面影残る筑波神社の門前町



つくば道の起点は北条です。  
江戸時代、土浦藩の陣屋がおかれ、在郷町として発展しました。

北条から筑波山に、一直線に延びるつくば道の中程に、神郡があります。  
平入り二階建ての土蔵造り商家が残る門前町です。  
板塀を巡らせた屋敷も残り、神郡が農村集落と在郷町の両方の性格をもっていたことが伺えます。

道はまっすぐ筑波山に向かっていきます。  
神郡を抜けると道は一旦下りますが、川を渡ると一気に登り坂にかわり、山頂に近づくほど勾配は急になっていきます。

